

テレビ時代の放送教育にみる幼児番組の成立と浸透 — NHK「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組を事例として —

The Appearance and the Prevalence of Educational Programs for the Preschoolers in the TV Era — The Case Study of the NHK Music programs on “The time of Kindergarten and Nursery School” —

葉 口 英 子

要約

本研究は、1958年から2006年にかけて放送されたNHK教育テレビ番組「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組に着目し、その内容と受容過程を明らかにし、番組の浸透と展開にみる特質を考察する。テレビ時代の「幼稚園・保育所の時間」番組は、学校放送の普及を背景に、全国の幼稚園・保育所において教育的な活用を目的として、NHKをはじめ、文部省ほか放送教育を推進する研究組織の振興を背景に、広く受容された経緯が明らかとなった。

キーワード

放送教育と幼児、NHK教育テレビ番組、幼児と音楽、幼稚園・保育所の時間、なかよしリズム

はじめに

1. NHK教育テレビ「幼保の時間」番組の登場
2. 「幼保の時間」の音楽番組の概要と実践
3. 「幼保の時間」の導入と普及の背景
4. テレビ時代の放送教育と幼児番組の特徴
おわりに

はじめに

日本のテレビ放送は、1953年2月1日、日本放送協会（以下NHKと略して記述）東京テレビ局により開始されるが、当初から学校放送¹⁾は定時の番組編成に組まれていた。ただし、当時の学校放送は小学校、中学校向けの番組であり、未就学児童である幼児²⁾を対象とし

た幼稚園、保育園向けの番組は存在しなかった。しかし、1957年以降、“幼稚園・保育所”³⁾の校種が新たに加わり、1958年には、いわゆる「幼稚園・保育所の時間」（以下「幼保の時間」と略して記述）と称する番組枠ができ、音楽を扱う番組もあった。1959年1月、NHK教育テレビ局が開局したのちも幼児向けの音楽番

1) NHKでは1925年のラジオ放送開始から10年後、1935年以降に小中学校、幼稚園・保育所に向けた学校放送番組が存在していた。

2) “幼児”の定義は、児童福祉法が定める「1歳から小学校就学の始期に達するまでの者」が一般的な定義である。ただし、保育所は0歳から満5歳、幼稚園は満3歳から満5歳の子どもが入園対象となる。ちなみに学校放送としての「幼保の時間」では3歳から5歳までの未就学児童を対象としている。

3) 日本では、「幼稚園」と「保育所」は基本的に別の目的と機能をもつ施設であり、異なる制度のもと普及し発展した歴史がある。幼稚園は学校教育法が定める幼児期の教育を施し、一方の保育所は保育が基本業務である。ただし、NHKの学校放送では当初から学校種を「幼稚園保育所」と記述し、両者は未分化のまま扱われる。従って、本稿ではこうした概念を踏襲し、「幼稚園・保育所」という併記を採用する。

組は何度かの内容変更を重ねながら、1958年から2006年にかけて9本のタイトルの番組が提供された。

本稿は、NHK教育テレビが学校放送として提供した幼児番組の音楽番組に焦点をあて、その成立と進展の過程とともに、番組内容と受容にみる特徴の確認を通じて、テレビ時代の公共放送が提示した幼児番組について考察する。

手続きとして、第1章では、テレビ放送開始からの学校放送や教育テレビ開局を踏まえ、「幼保の時間」の成立と変遷を辿る。第2章では、長期にわたって放送された音楽番組『なかよしリズム』(1966-1987年)に着目し、その内容と実践を明らかにする。第3章では、現場でいかに番組が導入され、実践されたのかを確認する。また幼稚園・保育所での放送教育の普及に影響力を持った研究組織の動向をみる。

ここで「放送教育と幼児の音楽」に関連する主な先行研究について手短かに整理する。そもそも本稿のテーマは、広義に捉えると「放送教育」、「学校放送」、「子どもとメディア」の範疇にある。

まず、日本放送協会設立当初から放送教育、視聴覚教育を提唱した一人である心理学研究者の波多野完治⁴⁾は、1938年に『児童社会心理学』で「子どもと映画」、「子どもとラジオ」を著している。戦後も放送教育、視聴覚教育に関する多くの論考を重ね、テレビ全盛期の時代では「テレビ教育の心理学」、「テレビと児童」、「マスコミと児童文化」といったテーマを広く論じている⁵⁾。

次に、放送メディア研究の分野では、NHK放送文化研究所が、子ども、幼児向けのNHK番組や学校放送の視聴状況およびメディア利

用に関する定期的な調査を実施している。とりわけ、放送文化研究所の小平さち子による一連の研究の蓄積がある。次に、メディア論、歴史社会学を専門とする佐藤卓己の『テレビ的教養』(2008年)は、戦後日本社会のテレビ史において、NHKが教育放送と学校放送を通じて、教養・教育のメディアとして機能し、「テレビ的教養」なるものを構成、再構成してきた経緯を明らかにした。さらに、教育心理学の分野では、幼児のテレビ理解や視聴行動⁶⁾に関する研究がある。

このように、「子どもとテレビ」を扱う領域は、メディア論、放送研究、心理学、マス・コミュニケーション論、子ども研究など多岐の領域に見受けられる。ところが「テレビと子ども」、「学校放送」、「放送教育」をテーマとする研究にあって、その対象を“幼児”とした場合、先行研究は量、質ともに限定されてしまう。その理由には、例えば、比較的広義の概念として“子ども”を捉える場合、その中に幼児や乳幼児を含まない場合も多く、さらに、放送教育の研究分野では、“幼児”を対象とする、あるいは“保育”という領域になると、手引書や報告書に代表される、いわゆる実践研究のアプローチが大半となる。つまり、“幼児”を対象とする研究領域では、その教育を施す現場や実践者が学校放送をいかに活用するかといった方法論に重きが置かれる傾向にあるといえよう。

ただし、参考となる研究もいくつか挙げられる。例えば、小川・小笠原編『幼児放送教育の研究』(1989年)⁷⁾は、教育テレビ番組を幼児の情報環境と捉え、その情報が幼児にふさわしい内容か、番組テキストの分析と番組の映像分析をおこない、教育的意味を評価し、考察する。また、幼稚園史に関する著書もあ

4) 羽多野は学校放送と視聴覚教育の推進において重要な役割を果たした学者の一人であった。波多野は、「放送教育の父」と称される西本三十二(1933年日本放送協会に入社後、戦後日本放送教育協会を設立し理事長となる)とともに学校放送、放送教育に関する共著を出版するなどその活動に大きく貢献した人物である。

5) 波多野完治全集8『映像と教育』(1990) 小学館

6) 村野井均は『子どもはテレビをどう見るか』(2016)、『子どもの発達とテレビ』(2002)といった著書をはじめ、幼児のテレビ理解、視聴行動、メディア・リテラシーに関する研究を扱う。

7) 本書は、東京学芸大学の幼児放送教育研究会のメンバーによる一連の研究が日本保育学会、日本教育学会にて報告されているのだが、そのメンバーが執筆した共著である。

る児童文学者、上笙一郎の著書『テレビと幼児』(1969年)では、テレビ以前の児童文化領域の視聴覚メディアとの連続性を強調した上で、1969年当時の幼稚園・保育所でのテレビ利用にも触れ、本稿が扱う「幼保の時間」番組への言及も見受けられる。そしてこの著書の随所にテレビ文化と幼児に関する批評が散見され、児童文化全般に造詣の深い著者の主張は当時の言説の重要な手がかりとなる。

これらの先行研究を参照しながら、本稿はテレビ全盛の時代、公共放送が放送教育の一環として提供した「幼保の時間」にみる音楽番組が、幼児を取り巻く音楽環境や音楽文化に対し、いかなる媒介作用と意味を持って浸透したのか、検証する研究の端緒としたい。

1. NHK教育テレビ「幼保の時間」番組の登場

本章では、テレビ放送開始以降の学校放送の幼児向け番組「幼稚園・保育所の時間」の成立をみる。まず、学校放送の成立から幼児番組の登場までの前史を確認する。次にテレビを通じた学校放送の登場に着目し、幼児番組が導入された経緯をみる。

1-1. 学校放送の開始と「幼保の時間」の登場

学校放送 (educational broadcasting) とは「学校教育拡充のため、教室の児童、生徒を対象として送られるラジオ、テレビ放送」(ブリタニカ国際大百科事典)である。日本では、文部省による定義として「学校で児童・生徒または幼児が、教師の指導のもとに視聴し学習をすすめることを予想して、学校の教育課程の基準に準備をして製作され、放送されるもの」⁸⁾と示される。学校放送は、1923年にイギリス、アメリカで、1926年にドイツで始

まったとされるが、日本の学校放送は1933年、大阪放送局のラジオ放送から始まり、1935年に全国的規模としたのが嚆矢となる⁹⁾。1937年、毎週火曜日午前11時から15分間で「お話、音楽、童謡、唱歌、童謡劇、観察話」を放送した¹⁰⁾。

1941年には文部省がラジオによる学校放送を「国民学校放送」と改題し、正式な教材としたが、内容は戦時下を色濃く反映するものとなった。戦局が激しくなるに従い、1945年4月に学校放送は中止となった。戦後1945年10月、ラジオ学校放送が再開し、『幼児の時間』も復活する¹¹⁾。

1947年の学制改革により、小・中学校を対象としたラジオ番組が改めて編成された。以降、学校放送は内容を拡充させ、各学年向けの教科を編成しながら、本格的な再開を迎えた。1949年には『うたのおばさん』が幼児向けラジオ番組として始まる。ちなみに1950年当時の日本では、全国の幼稚園は2100園、幼児数は22万人、幼稚園の就園率は8.9%で、一方の保育所は3684ヶ所、入所児童数29万人に達した。

1953年2月1日、NHK東京テレビ局が開局し、NHKテレビ本放送も開始された。すでにラジオが先んじて学校放送を実施していた経緯もあり、テレビ放送ではラジオ放送の内容を踏襲する形で、小学校低・中・高学年、中学校低・高学年向けに、平日午後1時から15分間、月曜日から金曜日にかけて定時放送された¹²⁾。同年8月には、民間放送局の日本テレビ (NTV) の放送も開始され、NHKと同様、独自の教育教養番組を制作し放送した。

当初の幼稚園・保育所向け番組は、1956年の第3学期のテレビ学校放送番組表から、小

8) 文部省,1966,p12

9) ただし、NHKによるラジオ放送開始は1925年3月であるが、当初から『幼児の時間』という番組があり、幼児向け番組は初期の頃から存在していた。

10) 宇治橋,2012,p.201

11) 戦後占領下では、NHKの学校放送に対してCIE (民間情報教育局) の介入があった。当時CIEの学校放送担当官リンドシは学校放送枠の拡充に関し、内容に踏み込む指示をしていた (『教

育放送75年の軌跡』2012,p.20)。当時文部省にいた坂元彦太郎は「CIEに対しては文部省が (NHKの学校放送番組を) 指導してやっているということを見せかけなければならなかった。」 (『放送教育』1974年3月号,p.11) との発言を残している。

12) 1954年3月にテレビ学校放送利用校は250校、1955年には約1000校になった。(全国放送教育研究会連盟,1986,p.29)

中学校向けの番組に並んで、『みんないっしょに』(月曜日午前11:30~11:50)と『人形劇』(火曜日午前11:30~11:50)という各20分の番組が確認できる¹³⁾。翌年、1957年1月以降、この2つの番組を幼児向けの番組として1日に1回放送した¹⁴⁾。これがいわゆる「幼稚園保育所の時間」と称される番組枠が形成された初期の段階であった。ちなみに、NHKのラジオ、テレビの学校放送では、幼稚園と保育所は、「幼稚園保育所」と表記され、学校種としては同列で、分化しない形で扱っていた。つまり、幼稚園・保育所に通う3歳から5歳までの未就学児童が対象であった。

ちなみに、前年の1955年は、日本では幼稚園・保育所の普及が急速に進み、幼稚園が5426園、幼児数は64万人、就園率は20%、保育所は8392ヶ所、入所児童数65万人を記録した。こうした当時の社会における幼稚園・保育所の存在と役割が大きくなるに伴い、1956年、ついに学校放送では幼稚園・保育所向けの番組枠が新設された。同年、文部省が「幼稚園教育要領」を発表すると、「幼保の時間」の番組内容もそれに伴う形となり、その後も他の学校種と同じく、文部省の教育指針の変化に従い、番組内容も変化を遂げていく。

この新しい「幼稚園教育要領」以降、幼児教育の「音楽、生活指導」の領域に対応する番組として『みんないっしょに』が、「情操陶冶の領域」では『人形劇』が編成された。1958年の番組の放送時間帯は、『みんないっしょに』(月曜日午前11:00~11:15)、『人形劇』(水曜日午前11:00~11:15)、『リズムあそび』(金曜日午前11:00~11:15)がそれぞれ15分間の内容で放送された。

1-2. NHK教育テレビ「幼保の時間」番組の変遷

1957年10月、郵政省の電波政策により、「教

育的教科を目的とする放送局の設置」が進められ、教育専門局として、NHK東京教育テレビジョン局と商業放送である日本教育テレビジョン¹⁵⁾が発足した。そして、1959年1月10日、正式にNHK東京教育テレビジョン局が開局を迎えた。この頃には、テレビ受信機を設置する世帯数は200万世帯に近づき、教室でテレビを利用する学校数も1万校を超えた。教育テレビ開局の際、幼稚園・保育所も含め、小学校、中学校対象に1日4本(土曜日は3本)の番組が放送される。7月に改正された「放送法」の「日本放送協会国内番組基準」には、学校放送に関する基準が新たに加わった¹⁶⁾。その結果、「幼保の時間」番組は、幼稚園・保育所の施設内において幼児を指導するためのカリキュラムの教材として制作し、放送するという方針が一層明確となった。その後の番組の方針や内容は、文部省刊行「幼稚園教育要領」や厚生省刊行「保育所保育指針」に準ずるものとなる。

1960年4月、NHK教育テレビでは、午後3:30から「教師の時間」という教師向け番組も放送され、学校放送は幼稚園から高校向けまで、1日4時間10分の時間が割かれ、内容も一層の充実がはかられた。さらに、教育テレビ局は全国に27局が設置され、地方への浸透も加速化した。そして「幼保の時間」は6番組と増え、月曜日から土曜日までの放送枠が定着する。

ここで放送史における大きな変化が生じた。カラーテレビ本放送の開始である。その第一歩は東京・大阪局から始まり、1960年9月10日、NHK教育テレビの「幼保の時間」番組『かっちゃんの水族館』が初めてのカラー放送となった。

1961年には、文部省が『学校における視聴覚教材の利用』を刊行し、放送教育を学校現場に導入する機運がさらに高まった。1964年

13) 日本放送協会,1960,p.393

14) 幼児向け教育番組の変遷については、小平の論文(2016,p.15)が詳細に整理している。

15) NETは教育局として、郵政省から教育番組50%、教養番組30%の常時編成が義務づけられていたが、次第に学校利用が停滞し、民放教育テレビは衰退の経緯を辿った(『教育放送75年の軌跡』2012,p.24)。

16) 第3項学校放送番組「1 学校教育の基本方針に基づいて実施し、放送でなくては与えられない学習効果をあげるようにつとめる。2 各学年の生徒の学習態度や心身の発達段階に応ずるように配慮する。3 教師の学習指導法などの改善・向上に寄与するようにつとめる。」

3月の「幼稚園教育要領」改訂（文部省告示第69号）の中に「放送」という言葉が登場する。例えば、言語部門の4つの柱の第4に、絵本や紙芝居に「放送」が加わった¹⁷⁾。また言語領域の留意点の中で、「絵本および、紙芝居、スライドなどの視聴覚教材を精選し、喜んで見たり聞いたりするような態度を養うと共に、幼児の経験を広め、豊かな情操を養うようにすること」とあり、視聴覚教材の1つとして、ラジオ・テレビによる放送教育の導入を明記した。一方、「保育所保育指針」ではラジオ・テレビの利用を発達段階別に、大項目の「②保育のねらい」と「③望ましい主な活動」の言語領域の中に「放送」という言葉が入った¹⁸⁾。

1965年「幼保の時間」がカラー放送への移行を完了した翌年の1966年、文部省は放送教育の普及と社会的機能の拡充化をはかるため、放送法における教育放送の定義を明確に

した。学校教育番組を「学校の教室の児童、生徒または学生にむけて法令の定める教育課程の基準に準拠して行われる番組（学校放送番組）」として明記したのである。1966年には、「幼稚園教育要領」に対応した6領域「情操教育」、「生活指導」、「自然観察」、「社会見学」、「音感教育」、「絵画製作造形」の番組体制が整った（表1）。また、放送時間は、1週間に再放送、再再放送と3回異なる時間帯での放送が定型となった（表2）。教育テレビ1日の放送時間は18時間となり、学校放送の時間枠は午前9時から午後4時までの7時間と増加する。これは開局当時、1日9時間、学校放送が55分であった点と比較するとその拡充が確認できる¹⁹⁾。

1979年には幼稚園・保育所の合計在籍者は、4歳児の79.0%、5歳児の90.%に達した（図1）。その時期には、制作者と研究者が共同で「2歳児テレビ番組研究会」を発足し、2歳児

表1 「幼稚園・保育所の時間」番組概略（初期から1966年まで）

	1958年	1959年	1962年	1963年	1966年
情操教育	人形劇	→			にんぎょうげき
生活指導	みんないっしょに	→			くまものこパンプ
自然観察		おててつないで	→		よくみよう
社会見学		かっちゃん	きたよきたよ		いってみたいな
音感教育	リズムあそび			ドレミファ船長	なかよしリズム
絵画製作造形		できたできた	→		なにをあそぼ

表2 1964年度と1986年度にみる「幼保の時間」枠の番組編成

	月	火	水	木	金	土
9:40～10:00	きたきたきたよ	みんないっしょに (再)	おじさんお話してよ (再)	人形劇 (再)	音楽 ドレミファ船長 (再)	おててつないで (再)
10:40～11:00	みんないっしょに	おじさん お話してよ	人形劇	音楽 ドレミファ船長 (再)	おててつないで (再)	きたよきたよ (再)
14:40～15:00	音楽 ドレミファ船長	おててつないで	みんないっしょに (再)	おじさんお話してよ (再)	人形劇 (再)	

17) 「①絵本、紙芝居、放送などを喜んで見たり聞いたりする」との記述がある。

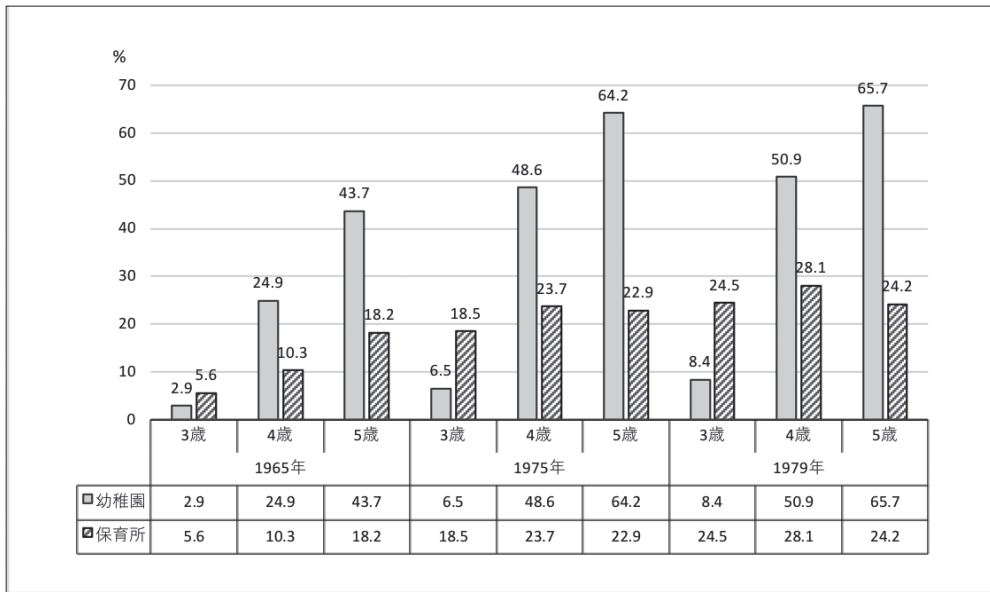
18) 例えば、「③望ましい主な活動の言語領域には、3歳児～「(4) 放送の好きな番組を見て楽しむ」、4歳児～「(2) 絵本、紙芝居、放送などを喜んで見たり聞いたりする」、5歳児～「(2)絵本、紙芝居、放送などに親しみ、おもしろさがる」

との記述がある。

19) 1962年の教育テレビの放送時間は1日10時間30分であり、教育テレビの受信地域が51%と広がった。1971年の「幼保の時間」の番組は、本放送が6本で1時間30分、再放送が11本で2時間45分で、1週間に17本の番組が放送され、4時間15分の時間があてられた。（赤堀,2012,p.29）

	月	火	水	木	金	土
9:15～ 9:30	ばくさんのかばん	にんぎょうげき (再)	できるかな (再)	おーい!はに丸 (再)	音楽 なかよしリズム (再)	ばくさんのかばん (再)
10:30～ 11:45	にんぎょうげき	できるかな	おーい!はに丸	音楽 なかよしリズム	ばくさんのかばん	みてごらん
15:00～ 15:15	音楽 なかよしリズム (再)	ばくさんのかばん (再)	にんぎょうげき (再)	できるかな (再)	おーい!はに丸 (再)	

図1 幼稚園と保育所在籍者の年齢別在籍率 (文部科学省HP『我が国の教育水準』
「(1)幼稚園の在園児数」の表からグラフを作成)



向けの教育番組の開発を進めた。ただし、この成果は、母親との家庭視聴を想定する総合テレビでの幼児向け番組『おかあさんといっしょ』²⁰⁾に反映された。

ここまでの流れを整理すると、60年代半ばから80年代後半にかけて、「幼保の時間」は学校放送として幼稚園・保育所の現場や指導者にその存在を知らしめ、浸透する経緯をみせた。例えば、1970年開始の長寿番組となった造形番組『できるかな』や1980年代の数と言語『ばくさんのかばん』、3歳児向けの言葉の

番組『おーい!はに丸』は、放送利用状況調査を踏まえ、現場からの要請に応じて開発された番組である²¹⁾。その背景には、幼稚園・保育所に通う幼児人口の増加に加え、文部省他、教育行政や研究組織が推進するテレビ放送教育への期待が大きく作用したといえる。1990年代になると、「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」の再度の改訂に伴い、幼児教育の領域が6領域から5領域に変化したため、幼児向け番組も大幅な改編がなされた。「幼保の時間」は、番組タイトルの変更だけ

20) 1959年10月にNHK総合テレビで放送開始した『おかあさんといっしょ』は家庭視聴向けであり、幼稚園・保育所での集団視聴を目的としていな

いものの、NHK幼児向け番組の代表といえる。
21) 宇治橋,2012,p.202

でなく、内容、ねらい、番組構成、企画者、出演者、登場キャラクターなど経年ごとの変遷が見受けられた。

2011年、NHK教育テレビが「Eテレ」と呼称を変更し、午前中の編成にあった「幼保の時間」番組は、「Eテレキッズ」(幼児・子どもゾーン)へと移行し²²⁾、実質的には学校放送としての「幼保の時間」は消失した²³⁾。情報のデジタル化とインターネットの浸透により、メディア環境や情報環境が変容した現在、幼児向けの番組も大きな転換期を迎えた。

2. 「幼保の時間」の音楽番組の概要と実践

本章では、「幼保の時間」の音楽番組の内容と受容の特徴を明らかにする。まず、長期間放送された『なかよしリズム』の概要をみる。次に、『なかよしリズム』を取り入れた幼稚園・保育所での事例に着目し、その受容の実態を確認する。

2-1. 「幼保の時間」の音楽番組『なかよしリズム』の概要

「幼保の時間」の音楽番組は、1958年から2006年までに、『リズムあそび』(1958-63年)、「ドレミファ船長」(63-65年)、『なかよしリズム』(66-87年)、『プルプルプルン』(88-89年)、『ともだちいっぱいうたってあそぼ』(90-94年)、『うたってオドロロンパ』(95-2005年)、『あいので』(2006年)と9本のタイトルがある。これらの音楽番組は「幼稚園教育要領」の領域の変化に伴い、「音楽」「リズム」(1947年～)から〈音楽リズム〉(1956年～)、〈表現〉(1989年～)に対応した。

ここでは、最も長期間放送された『なかよしリズム』に着目する。この番組のコンセプトは「子どもたちと一緒に楽しめる、親しみやすい教材を提供する」とある。ただし、その内容や編成は、変更も見受けられる。例えば、1970年の番組紹介には、「流行の新しいリズムをいち早く覚えてからでのみこんでしま

表4 1974年度『なかよしリズム』年間計画

1学期		
4月の主題	リズムの国よ、こんにちは	幼児の生活や遊びの中から、さまざまなリズムを感じさせます。
5月の主題	みんなともだち	さわやかな初夏。身体全体を使って、のびのびと遊ばせ拍子感を養います。
6月の主題	なかよく遊ぼう	手や足を使って、リズム運動をする楽しさを感じさせます。
7月の主題	みんなで歌おう	夏の遊びを中心にメロディーやハーモニーの美しさを紹介します。
2学期		
9月の主題	みんな元気に	秋は、運動会、遠足、お祭りのシーズン。身体全体で音の強弱や速度に反応する力を養います。
10月の主題	みんなで踊ろう	体を使って、踊ったり、叩いたりしてリズムに対する反応力をつけさせます。
11月の主題	リズムの国をひとまわり	幼児たちに身近にあるリズムを楽しませながら、集団への遊びへと発展させていきます。
12月の主題	みんななかよし	音やリズムのおいかけや重なりを幼児と一緒に楽しみます。
3学期		
1月の主題	みんな風の子	お正月にまつわる歌や冬の遊びを通して、楽しい歌の表現活動に親しませます。
2月の主題	みんな名演奏家	幼児たちの大好きな楽器や、珍しい楽器を使って合奏し、音のひろがりの楽しさを味わわせます。
3月の主題	リズムの国の音楽会	1年間「なかよしリズム」で親しんだ曲、大好きだった曲の数々を紹介し、総まとめとします。

22) 2006年で「幼保の時間」の音楽番組はなくなる。

23) ただし幼児向け番組、幼保の時間の番組は、HP「キッズワールド」の「幼稚園保育所向け番組

の広場」があり、年間放送計画や放送番組を利用した保育実践が掲載される。

うのはこどもたちです。この番組は、音楽的に大きな可能性をもつ幼児に、リズムカルでいきいきした質のよい音楽をたくさん与え、幼児たちがそれをからだでうけとめ動き反応できるよう…おにいさん、おねえさんといっしょにあそぶうちに、簡単で愉快的リズムの動きを、こどもたちは毎回楽しんで覚えるでしょう。ある部分は見てたのしみ、ある部分は自然に番組に参加するかたちでその音楽的経験を豊かにしていく²⁴⁾とある。

1974年の番組紹介には「この番組は、幼児の大好きな歌や、リズムカルでいきいきとした音楽をもりこんだ、幼児のための音楽バラエティです。…とくに今年度は、歌のおじさんとおねえさんを中心に、楽しい歌やリズムを遊びをくりひろげ、アットホームな音楽番組にしていきます²⁵⁾と記され、毎月番組の小タイトルとねらい、それに合わせた番組オリジナルの歌や既存の歌が年間を通じて計画的に示された(表4)。

この中で、「音楽バラエティ」との言葉があるように、その後「歌、踊り、遊び」を通じた「バラエティ」によるエンタテインメント色を前面に出し、幼児に魅力ある内容を提供する試みが長期にわたって継続した。その慣例として、お兄さん、お姉さん、キャラクター、おじさんが登場する演出となった(写真2)。長年放送された『なかよしリズム』は、「子ど

もたちが本来持つ生き生きしたリズム感覚を刺激し、より豊かな音楽性を身につけ、音楽の楽しさを感じとる」ことを重視した。また、音楽・リズムと子どもの身体表現と結びつけ、「リズム遊び」を中心に音楽にあわせて動いたり踊ったりする、いわゆるショー型の演出と構成が特色としてみられた。

2-2. 現場にみる『なかよしリズム』の受容

次に「幼保の時間」の音楽番組はどのように幼稚園・保育所で利用されたのかを確認したい。まずその活用にあたって、現場の指導者向けに、放送教育の手引きや参考書をはじめ、実際の利用に準じた冊子も用意された。その1つは、毎年11月発行の『NHK幼稚園・保育所番組の利用とてびき：幼稚園・保育所年間保育計画資料²⁶⁾ (日本放送教育協会) という冊子だ。内容は、翌年度の年間番組内容と一覧表が示されるため、どの番組を1年間をとおして視聴するか(継続視聴)、必要に応じて単発的に視聴するか(随時視聴)、といった指導計画に資することを狙いとされたものだ。別の冊子では、学期ごと年に3回発行するテキスト『幼稚園保育所の時間』(日本放送出版協会)(番組との区別を明確にするた

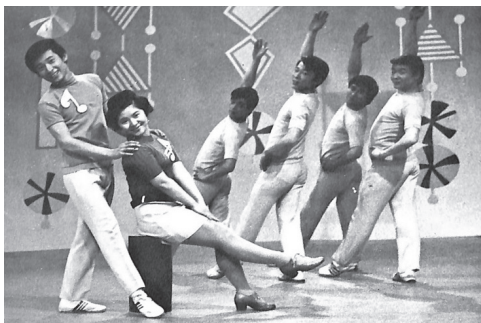


写真1 1970年度『なかよしリズム』の一場面
(テキスト『幼稚園・保育所の時間』
1970年9-12月 2学期号)



24) テキスト『幼稚園保育所の時間』S45年 1-3月3学期号, p.20

25) テキスト『幼稚園保育所の時間』S49年 4-7月1学期号, p.22

26) 表紙含むB5版11頁の薄い冊子である。



写真2 テレビ「幼稚園保育所の時間」のテキスト、昭和37年(1962年)度7.8.9号テキスト『NHKテレビ・ラジオ幼児の時間』表紙、昭和45年(1970年)度1学期テキスト『NHK幼稚園保育所の時間』表紙

め“テキスト『幼稚園保育所の時間』”と表記があった(写真2)。テキスト『幼稚園保育所の時間』は、いわゆる番組テキストに該当する。内容は、番組のねらい、内容、解説、歌の紹介、歌詞、楽譜等を掲載し、指導者に年間計画および月案・日案の予定を立ててもらうことを意図した。また放送される歌の歌詞も含む簡易楽譜と伴奏付の楽譜が巻末にも掲載され、具体的な活用を想定して編纂された。

放送教育協会や文部省刊行の手引きや実践集も刊行された。さらに、雑誌『放送教育』では「わたしの放送利用」という特集の中で、幼稚園・保育所、小・中学校の教員が学校放送番組を利用した「プランニング」や「日課表のくふう」が紹介された。ただし、放送教育推進派の教諭にあっても「幼稚園の生活というのは教科の生活ではなくて、遊びの生活の中で、集団生活をやっているんです²⁷⁾という発言にみられるように、現場で“教育的”利用をめざしたテレビ放送の導入は、他の小学校や中学校と比較しても難しい実践であっ

たとえられる。そこで実践の導入がいかなるものであったか、「幼保の時間」番組の音楽番組『なかよしリズム』に関する取り組みの事例を3点紹介したい。

まず一つ目は、1974年の名古屋市桂幼稚園大里修二教諭による「2月のプランニング」では「生きている音楽を“なかよしリズムを中心に”²⁸⁾というタイトルの記録である。この園では、1972年から『なかよしリズム』を継続視聴しているのだが、興味深いのは、番組の継続視聴は、(音楽リズム)領域の指導の一部として考えていないと主張する点である。番組の利用は「音楽を教え込むということよりは、生きている音楽を体験すること」であり、番組については、「ロック(アフタービート)曲や変身マーチなようなのりのよい歌があり、子どもへの素材の与え方とその素材の自由さ」が「幼児を楽しくさせ、音楽が好きになり、その能力もます」と評価する。この教諭は、当時の幼児教育内での音楽素材は、まず3和音のみの幼児歌曲(「くつがなる」、行事歌)と、和声的にも豊かになった子どもの歌(「とんでったバナナ」「犬のおまわりさん」など)の2つのタイプが代表であり、それが飽和状態にある、と指摘する。その上で、ロック曲や変身マーチは新鮮さを感じる音楽素材という。その点で、「1972年の『なかよしリズム』はおおいに評価できるが、1973年は番組の骨組みが「日常性」となったため、素材が行事歌、子どもの歌的になり、視聴中子どもから「これ知っているやつまんない」との言葉も出てきて、いわゆるのりが悪くなっていることが否定できない。」と報告する。

次に、1975年、愛媛大学教育学部附属幼稚園の酒井節子教諭の実践記録では、「放送の利用が保育において大いに価値のあることを私たちは十分認めている」としながら、前年はあまり放送を利用できなかったとの反省を踏まえ、「「せんせい、きょうはテレビをみせてくれるの」と目を輝かせる幼児をみながら、今年度こそは、計画的な保育を展開してみよ

27) 『放送文化』1957年,9月号,p.24

28) 『放送教育』1974年2月号,pp.20-21

うと意気込んでいる」²⁹⁾。日課表を確認すると、この園では、一斉視聴と自由視聴の形をとり、「番組によって導入として利用した場合」と「経験を豊富にしたい場合」の一斉視聴の形をとり、そのほかは視聴したい幼児だけ視聴させた。「この視聴覚教材としての利用法は、幼児にとって非常に興味深いようである」と評価しながらも、「なかよしリズム」をはじめ、「びっくりばこドン」は自由視聴であり、「一斉保育の後の休息もかねて視聴」させるための番組利用の意向を示す。

最後は、福井市麻生津幼稚三花分園、坂本美沙代教諭による学校放送教育相の入賞論文『なかよしリズム』の継続視聴による幼児の身体表現の変容(1984年)の冒頭には、「幼児番組「なかよしリズム」の継続視聴を始めたものの、教育課程への結びつき、日ごろの保育へどのように取り入れたらよいか迷う毎日でした。テレビ利用の手引きの内容から、自分が予想を立てて視聴した時の食い違い、視聴後に表現しようと選曲しておいた曲とテレビのイメージが合わずに、表現がスムーズに流れなかったことがよくありました。」³⁰⁾とあり、十分に活用できなかった当初の様子が伺われる。

久野登久子³¹⁾による「実用保育選書 放送教育ハンドブック」(1977年)には『なかよしリズム』での「びよんびよんびよん」を利用した時の写真が掲載されている。また本書の冒頭には「なかよしリズム」を活用した指導に対する幼児の感想がお手紙で紹介される。「“なかよしリズム”であそぶんだ タンブリンうってパンパンパン
カスタをたたいて タンタンタン とんだり
はねたり びよんびよんびよん
“カラーテレビをかっていただいてよかったね”
せんせいがうれしそうにわらったよ ぼくた

ちもうれしくてわらったよ……」³²⁾



写真3 「テレビと遊ぼう—「なかよしリズムを見ながら」—(久野.1977.p74)

以上、これらの事例は“先進的”な幼稚園の取り組みとして挙げられるが、番組利用の様子は多様な形で実践されたことが伺える。

3. 「幼保の時間」の導入と普及の背景

本章では、幼稚園・保育所において「幼保の時間」番組がいかに導入され、普及されたのか、その経緯を明らかにする。まず、放送教育と幼児教育はどのように交差し、互いに関連しながら進展していったのか、両者をめぐる言説を整理し、幼稚園・保育所でのテレビ放送教育の導入過程を確認する。次に、その背景にあった大きな影響力を持った研究組織の活動の内容をみる。

3-1. 放送教育と幼児教育

放送教育と幼児教育は合間っていかに進展したのか、両者をめぐる言説とはどのようなものであったのか。まず、幼児教育への放送教育導入を推進した小田豊による「放送による新しい保育の創造」では、保育の中に放送を取り入れることで具体的に何が変わるのか、次の4点を挙げる³³⁾。「(1)放送を取り入れることによって、従来の保育時間が短縮され

29) 『放送教育』1974年4月号,p.20

30) 全国放送教育研究会連盟,1986,p.204

31) 久野は、幼児教育を中心に長年活動している。高千穂学園幼稚園長、文部省教育実習調査研究協委員、NHK学校放送番組委員、東京都私立幼稚園協会理事である。また1967年に学校放送

教育賞受賞するなど幼稚園の放送教育推進に携わった一人である。

32) 「けんた」くんの書いた手紙。久野,1977,p.14

33) テキスト『幼稚園保育所の時間』「第35回放送教育研究会全国レポート」,S60年4-7月1学期号,p.78-79

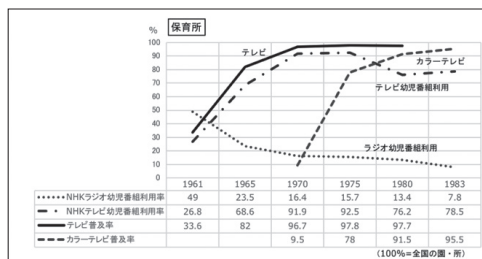
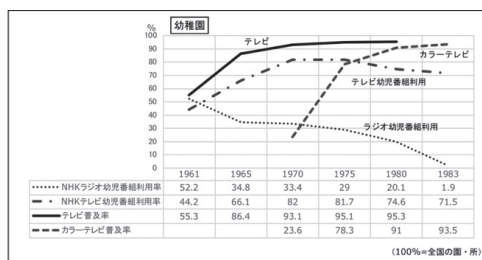
る。(2)子どもたちは、放送を絵本や紙芝居などより集中して、興味深くみる。(3)子どもたちは遊びの内容と方法を15分(放送)の間に知る。(4)子どもたちの興味・関心が、多面的に拡大される。」さらに、放送を保育に取り入れることは「子どもの感動を生かすことに主眼をおく保育であり、新しい保育の創造、それは、子どもを主体とした保育」³⁴⁾だと述べる。

また文部省の指導書では、幼稚園教育におけるテレビやラジオの教育的意義として、「(1)喜んで視聴する態度を育て、望ましい視聴のしかたを身につける。(2)生活を豊かにし、空想力を伸ばす。(3)経験を広めたり、深めたりする。」という項目を挙げる。

このように、幼児教育の場に新しい試みとして放送教育を投じることは、多くの利点を持ち、幼児の成長や発達に資するものだ、という論調が強調された。例えば、1969年の状況にあって、幼児が幼稚園・保育所で視聴するテレビ番組は、「家庭で視聴する民間放送局ではなく、NHK教育テレビの『幼稚園保育所の時間』に組まれた番組や、日本教育テレビの幼児向け番組に、重きがおかれている」³⁵⁾との意見に代表される、いわゆるテレビを通じた教育とその活用の効果に対する期待が大きく取り上げられたといえる。ただし、一方の教育現場では、こうした新しい放送教育の試みや期待に応えるには難しい実情もあった。

まず、テレビ放送開始は1953年であるが、比較的テレビの導入が早い園では、1955年前後に一台テレビを導入して一斉に子どもたちに見せたとの記録が残る³⁶⁾。しかし、この時期は幼稚園・保育所に限らず、小中学校でのテレビの普及状況も十分ではなかった事実もある。例えば、1957年の雑誌『放送文化』では、東京都内の幼稚園・小学校・中学校の教諭6名による「テレビを教室に取り入れて」という座談会では、小学校の富永教諭は「学校の中にももっと受信機を普及するような手を、

図2 幼稚園・保育所における幼児番組利用率および設備普及率(全国放送教育研究会連盟編,1986,p.436から抜粋して作成)



強力に打って貰わなければ駄目ですね。いまの学校の予算というものに比べたら、テレビはとびぬけて高くて手が出ないのです」と述べる。同様に幼稚園の小山田教諭もまた「私の幼稚園は公立なのですが、65ある幼稚園の中でテレビがあるのが、2月の調査で5つでした。…幼稚園でも、小学校よりも潤沢だと言われる予算をもらいながら、テレビが入らないということは、非常にテレビが高いということですね」と発言する。この会議にも同席していた中学校の岩本教諭は「学校でテレビが購入されても、校長室か職員室に1台あるだけで、教具として利用されていない」とテレビが教育機器として活用されていない実情を訴えている。

ところで、1961年から1983年までの幼稚園・保育所におけるテレビ、カラーテレビの普及率とNHK幼児ラジオ、テレビ番組の利用率の変遷を確認すると(図2)、テレビ放送開始の1953年から5年後には、テレビを備えた幼稚園は全国で5.2%、保育所では1.7%であった。しかし、1963年には、幼稚園では77.4%、保

34) テキスト『幼稚園保育所の時間』「第35回放送教育研究会全国レポート」,S60年4-7月1学期号,p.78

35) 小平,2016,p.15

36) 全国放送教育研究会連盟,1986,p.194

育所では57.4%と上昇し、さらに1965年には、幼稚園が86.4%、保育所が82.0%と10数年を経て、その浸透が見受けられた。

従って、テレビが幼稚園・保育所に普及し、本格的な番組利用のピークは1970年から75年であり、利用率も幼稚園・保育所ともに80～90%と非常に高い割合を示す。ただし、このテレビ利用の高い割合は、その利用の仕方でも多様な形態が存在したからだともいえる。なぜなら、幼稚園・保育所におけるテレビ利用にはかなりの幅があり、例えば、自由放任型、番組選択型、並行型、融合型の4種があったとされるからだ。まず、自由放任型とは、自由遊びの一つとして自由に視聴させるもの、次の番組選択型は、VTRがある先進園での実践として、学期に1、2度、子どもの好きな番組を選択させ、視聴させる、という形をとる。並行型は、前後の保育と関連なく自由遊びや紙芝居の時間と同列に、テレビの時間を継続視聴するもので、最後の融合型は、年間指導計画の中に位置付け、継続的に番組を利用したり、一日の保育の流れを番組中心に展開する、といったものだ。つまり、利用率が幼稚園・保育所ともに80～90%という数値で捉えたと、その利用がきわめて高いものであったとみなせるが、いかに実践されていたか、実情は施設によって差異が生じていたことは想像に難くない。この点については、テレビや放送教育を取り入れ、実践した当時を知る関係者に確認する必要があると考える。

3-2. 幼稚園・保育所での導入を支えた背景

本節では、「1960年代に質量ともに幼児向け番組が急成長し、放送利用教育を普及させるための全国規模の研究活動に支えられて、幼稚園・保育所での利用は急速に広がった」³⁷⁾との指摘にあるように、浸透の背景には、NHKの関連組織をはじめ、文部省、教育行政

他、特定の研究組織による強い関与があった点を確認する。

放送教育に関する研究組織の形成は、ラジオ学校放送時代に遡る。1948年、日本放送教育協会の発足に続き、同年の8月に「放送教育研究全国大会」が開催された³⁸⁾。翌年、「全放連」の前身となる放送教育研究会全国連盟(1950年)が発足する。1969年に全国放送教育研究会連盟に改称し、全国組織となる。そして、1955年、日本放送教育学会(現日本教育メディア学会)³⁹⁾が設立され、放送教育に対する関心がおおいに高まった。この組織の主な活動の一つは、文部省、NHK、開催地の教育委員会との共催で放送教育研究会全国大会の開催であるが、地方ブロック、県単位による地域別研究会も存在し、各地で定例研究会がおこなわれ、活発な活動が見受けられた⁴⁰⁾。

ただし、当初の放送教育研究会の研究組織には、全国・地方研究会で幼稚園・保育所は加わらず、正式に放送教育連盟に加盟したのは1956年である。この年は、文部省が「幼稚園教育要領」を公表した年でもあるが、第5回東京で開催されたテレビジョン教育研究会では、「教育の効果をあげるためにテレビジョンをどのように利用したらよいか」を主題とする部会において「幼児教育にテレビはどんな役割を果たすか」「幼児教育にテレビをどう利用すればよいか」というテーマが上がり、「幼児」を対象とする内容が初めて議題となった。

1957年のテレビを主題とした会では、全国各地で51回も開かれ、7600人の教職員が参加するなど、テレビ教育に関連する研究活動が急速に活発化した⁴¹⁾。例えば、1958年、東京でおこなわれた第9回放送教育研究会全国大会では、5000人以上の教員が集い、50余りの部会が開かれ⁴²⁾、2日目の実演授業には、幼稚園2園、保育所1園の参加があった。この

37) 小平,2016,p.15

38) 全国から700名の教員が集まったとされる。(西本,1960,p.184)

39) 例えば、放送教育研究会は、1950年11月に第1回全国大会が開催されているが、北海道、関東甲信越、東海、北陸、関西、中国、四国、九州

ブロックといった地方や各地区で研究組織が存在していた(放送教育研究会全国連盟S34年一覽より確認)。

40) 日本放送協会,1960,p.399

41) 同上,1960,p.412

42) 西本,1960,p.16

会では、当時の文部省大臣も参会し、「全国的な舞台で、正当に近い待遇をうけるにいたったことは、当然なことといながら、喜ばしいことである」⁴³⁾と学校放送推進者の一人坂元彦太郎（当時お茶ノ水女子大学）との発言にみられるように、この出来事が学校にラジオやテレビが正規の教具としての導入が“お墨付き”となり、放送教育、視聴覚教育の推進のさらなる弾みとなったと考える。

この組織の活動でとりわけ注目するのは、全国放送教育連盟が1958年以降、全放連盟形教育テレビ受信機を選定し、全国の学校に斡旋する事業をおこなったことだ。当時高価であった17インチテレビを免税価格で6万円で購入した。これは「多大の好評をもって学校側にむかえられたが、これが教育テレビの進展に寄与した功績が実に大きなものであった」⁴⁴⁾とあるように、この活動が放送教育の浸透と利用が急速に進んだ背景の一つである。その結果、1960年の全放連盟形教育テレビ受信機普及状況の調査によると、幼稚園の全国数16,586園のうち普及率は17.3%となった。全国の学校、幼稚園・保育所には、これら全放連のテレビ放送装置や教室用スピーカー、テレビ機材が「全放連規格品」として一斉に設置されたのである。

そして、1963年、静岡開催の第14回全国大会では、部会で幼稚園部門が登場し、幼稚園・保育所の本格的な参入を迎えた。翌年北海道での第15回全国大会では、3会場3部会体制となる⁴⁵⁾。

このあと全放送連盟の改組により、さらに大きな変化が生じた。1969年、幼稚園・保育所から小中学校、高校の各校種ごとに全国組織が結成され、特殊教育を含め、5つの校種

研究会の連合体として改組すると同時に、全国放送教育研究会連盟（以下、「全放連」と略して記述）と改称された。この改組をもとに全放連の傘下に公私立の幼稚園・保育所別に研究団体が立ち上がり、のちに「全幼連」（全国幼児放送連盟）という団体の形成の契機となった⁴⁶⁾。

一方、文部省では学校教育行政部門において、放送教育に関する施策が進められていたが、1953年8月社会教育局視聴覚教育課が設置され、社会教育、学校教育にラジオ・テレビ放送を積極的に取り入れる姿勢を示すと同時に方針を立て、その普及に向けた活発な活動を展開した。1970年、当時の課長五十嵐は、文部省発刊の事例集のまえがきで、「従来の視聴覚教材の概念にとらわれることなく、新しい教育機器も取りあげ、広く教育方法の改善という観点から、視聴覚教材の利用を位置づけています。」と述べ、教育機器としてラジオ・テレビ推進の立場を明確に掲げる。さらに、省として1953年以降、視聴覚教材の利用に関する研究委嘱を開始し、1969年から中学校、1970年から小学校各22校に対する教育機器利用の研究委嘱をおこなうといった取り組みをみせた。

1982年に発行された『昭和57年度NHK幼稚園・保育所番組と利用の手引き』では、第32回放送教育研究会全国大会にて、1200名の幼児教育関係者が全国から集まり、盛んな討議がおこなわれたと記録される。この時期には、放送教育に関するハンドブックや手引書も出版された。加えて、雑誌『放送教育』では、放送教育懸賞論文にて、幼稚園・保育所でのラジオ・テレビ利用に関する研究論文の投稿もでてきた。こうして放送教育に対し、“真

⁴³⁾ 『放送文化』1959年14巻1号,p.15

⁴⁴⁾ 日本放送協会,1960,p.399

⁴⁵⁾ ただし、各地方放送研究会では他の校種と比較すると幼稚園・保育所の参加は少なかったとある（北海道地方放送教育研究協議会編,1977,p.187）例えば、札幌地区幼児放送研究会の発足は1969年になる。それ以前の研究会での幼稚園・保育所の参加は、園単位ではなく個人の参加にとどまったとある。この状況は「ど

この都道府県も大同小異であったようである」と記されている。（同掲書,p.187）。

⁴⁶⁾ 東京都を例にあげると、1969年に発足した東京都幼稚園・保育所放送教育研究会（都幼放）は、東京都公立幼稚園教育研究会（公立幼稚園の研究組織）、東京都私立幼稚園協会（私立幼稚園の研究組織）、東京都保育研究会（公立保育園の研究組織）、東京都保育園連盟の4つの組織で構成された（久野,1977,p.175）。

面目”に取り組もうとする“先進的”な幼稚園・保育所の数は全国的な規模で増加していく。ただし、幼児教育の現場に放送教育を推進する組織や行政の介入状況は、一枚岩で捉えることは難しく、各施設による番組の実際の利用や受け止め方は実にさまざまであったとも考える。

これまで確認したように、ラジオ・テレビを利用した教育を推進する機運の高まりは、「ラジオとテレビにも教育の世界で正しい座を設ける」(西本,1960,p.188)という思想に支えられ、さらには文部省や教育行政、全国的な教育組織の関係者をも巻き込む大きな潮流の中、幼稚園・保育園も少なからず関与しなくてはならない、ある意味、強制的な力が働いた状況にあったといえるだろう。

4. テレビ時代の放送教育と幼児番組の特徴

ここまで本稿では「幼保の時間」の成立過程と番組の概要と実践を確認した。テレビという視聴覚メディアの特性を生かした放送教育に対する期待を背景に、番組が制作され、受容された様子も明らかとなった。最後に、「幼保の時間」の成立過程と音楽番組の内容と実践にみる特性を考察し、まとめる。

まず、1点目は、教育テレビ番組「幼保の時間」は学校放送の中に位置づけられ、視聴覚教育、放送教育の普及と浸透を背景に発展したという点だ。そもそも学校放送は、これを利用する学校側における法的根拠と、制作側にも同様の制作上の法的な定めがある。つまり、番組内容は学校教育課程の基準に準拠し続けなくてはならない。そのため「幼保の時間」の音楽番組の内容は、あくまでも「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」が示す〈音楽リズム〉、あるいは〈表現〉領域に準ずる形で提供され、教材としての現場での実用性が常に問題となった。一方、この制限による弊害も生じたと考える。例えば、6領域に対応する番組が教材として毎日15分放送され

るのだが、受け入れる側では、それを日々の指導計画に取り入れなくてはならない。ましてや年間指導計画に位置づけ、活用するには現場レベルではかなりの労力が費やされる。そのため単発的な利用の仕方や放任型の視聴にならざるをえない施設もあった。加えて、図3にあるように番組の企画制作過程には、NHKの上部組織や関連団体をはじめ、専門家、研究組織、現場(教員・生徒)の意向が介入する。こうした一連の手続きの煩雑さは、制作現場ではさまざまな試行錯誤の結果としてあらわれた。また学習指導要領や指針の改訂の都度、放送内容も変化を伴わざるをえなかっただろう⁴⁷⁾。

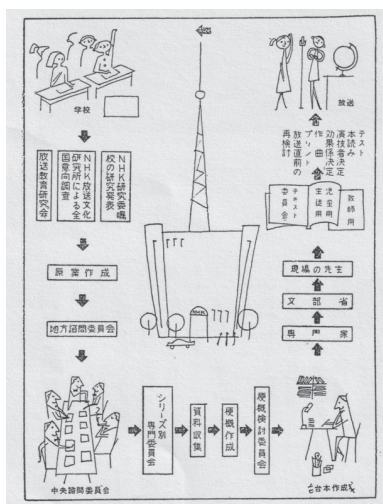


図3 『番組ができるまで』年間計画 (小田,1964,p76)

2点目は、幼稚園・保育所におけるテレビ放送教育の活用は、地域や施設による大きな差異があった点だ。1977年のハンドブックでは、「各園の地域性や幼児の実態によって差が著しいので、一貫した視聴指導の体系をはっきりと示すことは大変むづかしいこと」であり、「あまり一般論にこだわらず、自

47) 番組制作に関わるプロデューサーはじめ、出演者等をめぐる作り手の証言については稿を改めて紹介したい。

分の園の、自分の身近な幼児の実態をよく把握して、指導の方向を決めるべきである」(久野,1977,p.58)とある。放送教育を推進する立場の当事者としても、幼児教育でのテレビ番組利用の困難を指摘しているのだ。このことは、佐藤(2007)が、教育現場におけるテレビ受容=批判の変遷を分析し、文部省をはじめとする行政やNHKと協働したテレビ教育の導入をめぐり、現場の学校では対立や混乱が生じていた事実を浮き彫りにしたように、「テレビの教育化」の形骸化という指摘が、幼稚園・保育所の場合もあてはまると考える。

3点目として、テレビという新しいメディアの登場に対し、当時の社会、教育界でもその存在の過大評価と過小評価双方が混在したにもかかわらず、現場でのテレビ利用の豊富な実践例が存在した点が挙げられる。このことは、「幼保の時間」はNHKという公共放送が提供し、加えて文部省の教育要領や指針に則った“公的”な“お墨付き”の教材であり、導入すべきである、という強制力や影響力が受容の場でも大きく作用したからだといえる。

例えば、冒頭でも紹介した児童文学者の上の著書では、「テレビをいたずらに仮想敵として見ることを止め、この視聴文化を日常生活の正当なところに位置付け、またその内容をすぐれたものにしていかなくてはならない」⁴⁸⁾と主張し、「幼保の時間」の番組を留保しながらも評価し、推奨する言及があった。この主張にみるような、教育テレビ番組の幼児番組が特権的意味をもち、「テレビを教育に」というスローガンが当時の幼児教育の現場においても正当化され、放送教育を積極的に導入する考えの通底にあったと考える。

おわりに

本稿が取り上げたNHK教育テレビ番組「幼保の時間」の番組は、先行する聴覚メディア

であるラジオの慣例を引き継ぎ、テレビの視聴覚的特性である映像・音楽・音声、そして放送としての同時性、即時性、親近性という特質を生かしながら、放送教育を幼児教育現場への浸透をめざすものであった。それは、「テレビはともだち」(日本放送教育協会,1982)という言葉が象徴するように、幼児にテレビに親しみを持たせ、その日常的な常用を通じて教育効果、学習効果をはかるとうとする働きかけでもあった。

本稿で取り上げた教育テレビ番組「幼保の時間」は、幼稚園・保育所での集団視聴を目的としたが、実際には、家庭視聴もおおいにあった点も忘れてはならない⁴⁹⁾。「ラジオ、テレビそれぞれの放送の早い時期から、多様な教育番組が幼児向けに制作・放送されてきたことは、教育放送のみならず、日本の放送史全体の中でも特記されるべき内容といえる」⁵⁰⁾との指摘があるよう、本稿で確認した教育テレビの幼児番組も放送史の一端に位置付けたいと考える。

また今回は言及できなかった番組の詳細な内容分析や教育要領等との照応をはじめ、さらには受容の場にみる差異についてさらなる解明を進め、戦後昭和期の幼児教育、幼児文化に教育テレビ番組がいかなる意味を持って存在したのかを問い直し、検証したい。

《付記および謝辞》

- ・本稿は平成29年度静岡産業大学研究活動助成金「幼児・保育教育における「身体表現」の概念の導入とその運用に関する考察—保育実践・カリキュラム・保育内容にみる「リトミック」「音楽リズム」を中心に—」による研究成果である。
- ・本稿の第2、3章は放送文化基金平成29年度研究助成(人文社会・文化)に採択された「NHK教育テレビ枠『幼稚園・保育所の時間』の音楽番組が幼児教育の〈音楽リズム

⁴⁸⁾ 上,1969,p.95

⁴⁹⁾ 筆者は1971年生まれで、保育所・幼稚園でのレコード鑑賞の記憶はあるが、テレビ視聴の記憶はない。小学校では理科、社会、算数、音楽、道徳の授業内で学校放送番組の視聴経験があ

る。一方、家庭で教育テレビ番組を熱心に視聴した記憶もある。こうした家庭での学校放送番組の視聴経験についても今後調査を進めたい。

⁵⁰⁾ 小平,2016,p.15

- ム) 領域に与えた影響について」の調査・研究成果である。
- ・本研究はJSPS科研費18K02465 (2018年度基盤研究C: 代表) の助成を受けた成果の一部である。
 - ・本稿は大阪府立中央図書館国際児童文学館「特別研究者」(平成30年度) として、貴重な所蔵資料を活用した研究成果である。多くの雑誌や資料の閲覧・複写作業等にご協力いただいた国際児童文学館の関係者およびスタッフの皆様へ感謝申し上げます。
 - ・雑誌『幼稚園・保育所の時間』、『放送教育』ほか、保育教育に関する貴重な蔵書の閲覧、貸借にご協力いただいた倉敷市立短期大学附属図書館の関係者およびスタッフの皆様へ感謝申し上げます。
- 《参考文献・論文》
- 赤堀正宣(2012)「教育放送の基盤確立」『教育放送75年の軌跡』教育放送研究会、日本放送教育協会、pp.28-38
- 磯部武雄『わが国の学校放送史の研究』北樹出版
- 宇治橋祐之(2012)「幼児向け番組と幼稚園・保育所向け番組」『教育放送75年の軌跡』教育放送研究会、日本放送教育協会、pp.201-203
- NHK放送世論調査所(1981)『幼児の生活とテレビ』日本放送出版協会
- 小川博久・小笠原喜康編著(1989)『幼児放送教育の研究』川島書店
- 小田豊(1986)『保育のための放送教育』三晃書房
- 上笠一郎(1969)『テレビと幼児』明治図書出版
- 教育放送研究会編(2012)『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会
- 小平さち子(2014)「調査60年にみるNHK学校教育向けサービス資料の変容と今後の展望」NHK放送文化研究所年報58, 日本放送出版協会, pp.91-169
- 小平さち子(2003)「子どもとテレビ研究・50年の軌跡と考察」NHK放送文化研究所年報47, 日本放送出版協会, pp.53-110
- 坂元彦太郎(1961)『視聴覚材の教育構造』日本放送教育協会
- 佐藤卓己(2007)「学校放送から「テレビ的教養へ」」『放送メディア研究』第4号、NHK放送文化研究所、pp.59-85
- 佐藤卓己(2008)『テレビ的教養』NTT出版
- 白井常・坂元昂編(1982)『テレビは幼児に何ができるか』日本放送出版協会
- 汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子(2017)『日本の保育の歴史』(2017) 萌文書林
- 民秋言代表編(2017)『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷』萌文書林
- 全国放送教育研究会連盟、日本放送教育学会編(1986)『放送教育50年』日本放送教育協会
- 東京都放送教育研究会(1954)『放送と学習』明治図書出版
- 西本三十二(1960)『テレビ教育論』日本放送教育協会
- 西本三十二(1963)『テレビ教育展望』日本放送出版協会
- 西本三十二(1966)『教育の近代化と放送教育』日本放送出版協会
- 西本三十二・波多野完治・海後宗晋臣・坂元彦太郎(1959)『ラジオテレビ教育精鋭』日本放送教育協会
- 西本三十二・波多野完治・監修(1958)『視聴覚教育事典』明治図書
- 日本放送教育協会(1958)『幼児とテレビジョン』日本放送教育協会
- 日本放送教育協会(1982)『幼児の成長と放送: 放送教育別冊4』日本放送教育協会
- 葉口英子(2008)「昭和初期(1925-1937年)のラジオ番組『子供の時間』にみる音楽に関する考察」静岡産業大学10、pp.79-96
- 波多野完治全集8『映像と教育』(1990) 小学館
- 波多野完治(1960)『現代テレビ講座—教育・教養篇』ダヴィッド社
- 波多野完治監修(1968)『学校放送・校内放送実践資料図解大事典』全国教育図書
- 久野登久子(1977)『放送教育ハンドブック』ひかりのくに

船越章(1967)『ラジオ・テレビ放送研究必携』
新月社

放送出版協会(1958)『幼児とラジオ、テレビ
ジョン』日本放送教育協会

北海道地方放送教育三〇年史編集委員会編
(1977)『北海道放送教育三〇年史』北海道
地方放送教育研究協議会

教育放送研究会(2012)『教育放送75年の軌跡』
日本放送教育協会

村野井均(2002)『子どもの発達とテレビ』か
もがわ出版

村野井均(2016)『子どもはテレビをどう見る
か』勁草書房

文部省(1959)『テレビジョン教育番組とその
利用』日本放送教育協会

文部省(1966)『学校放送の利用』光風出版

文部省編(1968)『学校放送の利用』日本放送
教育協会

文部省(1968)『教育と放送』日本放送教育協
会

文部省社会教育局視聴覚教育課編集『視聴覚
教育指導事例集』第一法規

文部省(1971)「我が国の教育水準」(昭和55年
度) 文部省大臣官房編集・監修(「第1章
戦後30年の教育の推移2(1)幼稚園の在園児
数」) 現・文部科学省HP

[http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/
hpad198001/hpad198001_2_007.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198001/hpad198001_2_007.html) 2018年8
月25日閲覧

アスキー書籍編集部(2005)『懐かしのNHK こ
ども番組コレクション』アスキー

幼児文化研究グループ編(1966)『幼児の放送
教育』フレーベル館

《雑誌》

『NHK幼稚園保育所の時間』日本放送出版協
会、45,46(2),47(2),48(2-3),49-62,63(1-3,9-
12);1989-1995,1996(1-3),1997(9-12),2001-
2004,2005(9-12)、1970-2005年

『放送教育』日本放送教育協会、28(10-
12),29(1,3-12),30-35,36(1-9)、1974-1981年

『放送文化』日本放送協会、4巻4号(1949.4)～
40巻3号(1985.3)

『視聴覚教育』日本映画教育協会、24(10-12)
～25(11),27(2,4-12),28-38,39(1-6)、1970-

1985年

『NHK幼児の時間テキスト』NHKサービスセ
ンター、1959-1970年5冊巻号表記なし

日本放送協会編「NHK幼稚園・保育所番組と
利用のてびき：幼稚園・保育所年間保育計
画資料 昭和57年度」

